

保育表現技術としての「子どもの歌」弾き歌い集団演習

Group lesson to improve the practical ability of the childminder
to sing with playing a piano by oneself

林麻由美（東京福祉大学短期大学部）

Mayumi HAYASHI(Tokyo University of Social Welfare Junior College)

（要旨）

保育表現技術の1つである「弾き歌い」は保育者養成校の学生が学ぶ必須課題である。筆者は、この「弾き歌い」をアンサンブルと歌唱の視点からアプローチし、「子どもの歌」を弾き歌いするまでの練習過程を、段階的に提示した集団演習を行った。今回はアンサンブルでのアプローチという事で、完成形（両手での弾き歌い）の前の段階で授業を終了したが、授業後の学生達の振り返りの記述から、学生達が「弾き歌い」の集団演習を行うことにより、保育現場での実践的な能力を身に付けたことが分かった。

（キーワード）

保育表現技術、子どものうた、弾き歌い、集団演習

1. はじめに

本学の学生数人が、実習を目の前にして実習先より課題として出された数曲の「子どもの歌」のピアノの練習が大変困難であると、筆者のところに相談に来た。その課題曲の楽譜の左手の伴奏部分を見ると、ピアノの初級者が実習現場で困らないレベルに到達するまでには、かなりの時間がかかることが筆者には容易に想像できた。また学生達は、数曲ある課題を限られた時間内に仕上げて実習に臨まなくてはと考えると、精神的な負担もかかり、ピアノに関して焦りばかりが募るとのことであった。

「弾き歌い」は保育者としての重要な保育表現技術の1つである。保育現場では単にピアノだけ弾ければ良いのではなく、ピアノを弾きながら同時に歌も歌う「弾き歌い」能力が求められる。平石（2014）の

調査によれば、幼稚園、保育所が養成校に望む音楽教育は、ピアノ曲の指導40%に対し、弾き歌いの指導が58%となっており、保育現場は弾き歌いの指導をより望んでいることが分かった。実習を目前にした学生達が、設定すべき最終ゴールが、学生達自身が思っている「ピアノが弾ける」ことにあるのではなく、その先にある「弾き歌いができる」にしなければならないことを、彼等は認識していないように見受けられた。

さて、保育所保育指針、幼稚園教育要領の領域「表現」の内容には、音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わうと表されており、…保育士等（教師など）の大人が歌を歌ったり楽器の演奏を楽しんだりしている姿に触れることは、幼児が音楽に親しむようになる上で、重要な経験であると解説されている。

そこで筆者は、保育者が「子どもの歌」を「弾き歌い」する際、たとえピアノの演奏が不得手であっても、子ども達と共に音楽活動を楽しんで行えるようにするための、「弾き歌い」の練習方法の提示が必要であると考えた。

2. T 大学短期大学部の音楽の授業の現状

本学の音楽の授業は20～30人の学生に対し、教員が一人で指導する形態である。筆者は音楽の授業を担当していない。そのため音楽担当教員に聞いたところ、次のようなものであった。

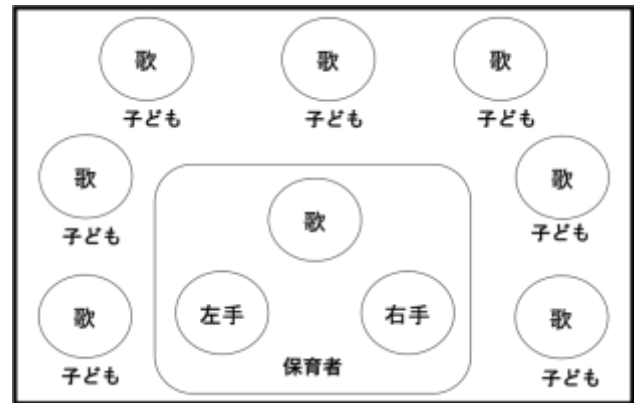
- ・ピアノの演奏技術は学生によって異なるので、その学生のレベルに応じた課題曲を練習させている
- ・音楽の授業を行う教室には40台ほどの電子ピアノがある。
- ・教室に学生を一堂に集めて、教員が一人一人順番に個人指導を行う。
- ・授業1コマあたり、一人の学生への個人指導時間は3～5分程度である。
- ・個人指導を受けていない間は、ヘッドホンを使ったピアノの個人練習をさせている。

なお、幼稚園、保育園200箇所を対象にしたピアノ演奏や歌唱に関する必要な音楽能力について中野らが行ったアンケート調査(2012)によれば、演奏、伴奏能力よりも平易な弾き歌いができることが現場で必要とされているという結果が得られており、現状の音楽の授業では、現場が求めているピアノを弾きながら歌うという「弾き歌い」能力の育成にまで手が回っていないと筆者は判断した。

3. 保育現場で求められる実践的な弾き歌い能力

育成のゴールとなる現場が求める「保育現場が求める弾き歌い」能力について考察することとした。

「保育現場における」弾き歌いを同様にモデル化したものが次の図である。(図1)



(図1) 弾き歌いのモデル化

(図1)は、保育者が弾き歌いをしていて、周りの子ども達と一緒に歌っている様子を表している。現場では歌い手は、保育者と子ども達であることを踏まえた上で、単なる弾き歌いと、保育現場での弾き歌いの相違点を考えると、次の2点が挙げられる。

- ・保育者は、子どもと一緒に歌う。時には子どものペースに合わせて演奏する。
- ・保育者がピアノ演奏をミスしても、子ども達はそのことを考慮しない。(演奏が止まってもどんどん歌う)

以上のことをまとめると、保育現場が求める弾き歌い能力とは、少なくとも次の3つが必要であると筆者は考えた。

- (ア) ピアノを弾きながら子どもと一緒に歌える能力
- (イ) 子どものペースに合わせられる能力
- (ウ) 演奏を止めてしまっても途中から再開させる能力

4. 筆者が考えた授業方法の概要

前述した3つの能力の育成を目標として、本学の現状を踏まえ以下のように授業を行うこととした。

●右手だけの演奏+歌、左手だけの演奏+歌の練習をさせる。こうする事で、演奏の難易度が下がるので、学生は歌うことに意識を向けられるようになる。

●学生のピアノ習熟度とは関係なく、全員同じ教材

を使用する。歌詞を把握し歌うことを目的としているので、同じ教材が良い。

●「左手」は楽譜通りではなく、簡単なコードを弾かせる。紙屋ら（2008）は「コードを用いた伴奏法は、音楽的知識や技術の有無に左右されない」と述べている。また、田中（2018）は「ほとんどの平易な曲は主要三和音で示すことができる」と述べている。ただし、ピアノの初学者はコードネームを見てすぐに弾くことが困難であることから、筆者は更に早く習得させるために、コードを色分けする工夫を行った。ピアノ初学者の学生は、演奏だけで手一杯なのが実情であるため、ピアノ演奏の負担を軽減することで歌う余裕を作ることを狙う。

●集団で弾き歌いの練習をさせる。こうすることで、保育現場と同様の環境で練習することができるようになるため、他者の音を聴きながら合わせた、演奏開始の合図を出す練習ができる。また、自分だけ演奏が止まっても集団の演奏に追いつく練習も可能となる。

5. 授業内容の詳細

「保育表現技術演習」の授業において、「弾き歌い」の集団演習を4回行う。

【対象】

T 大学短期大学部 2 年生 36 名

【場所】

音楽室（一人一台の電子ピアノが用意されている。ML システムではない。）

【時期】

令和元年 10/9, 23, 30, 11/6 の 4 回

【曲目】

「アイアイ」ハ長調（楽譜 1）

「おもちゃのチャチャチャ」ハ長調（楽譜 2）

※保育現場で歌われる機会が多いと思われる 2 曲を選曲した。

【授業準備】

楽譜を配布する。（譜例 1・譜例 2）

「弾き歌いの練習方法」のプリントを配布する。歌詞だけを表記したプリントを配布する。

（歌詞は、赤、青、緑などの色で囲んである。）本論では 1 番の歌詞のみ掲載する。

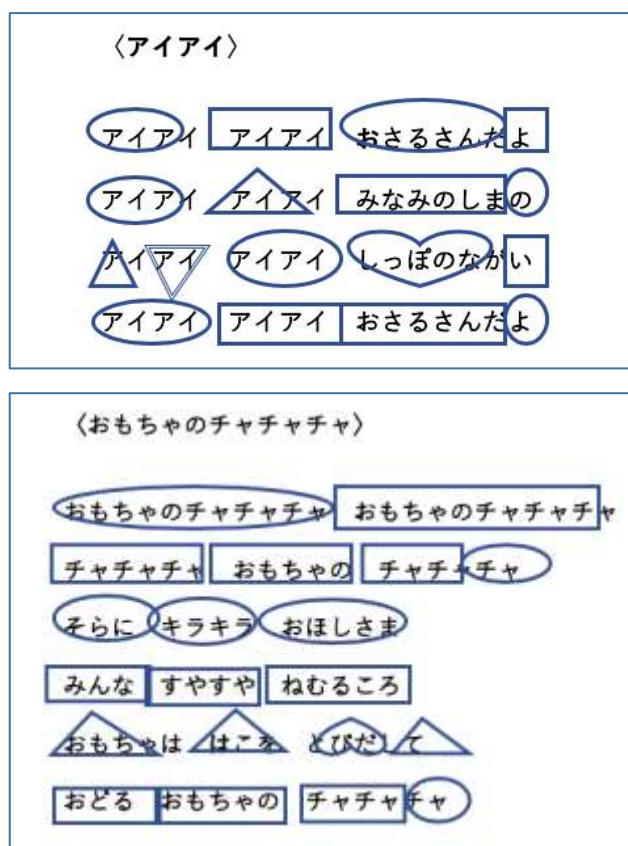
和音の種類を○、□、△、▽で示す。（図 2）

（譜例 1）アイアイ

出典 神原雅之、鈴木恵津子編著 改訂 幼稚園教諭・保育士養成課程「幼児のための音楽教育」

（譜例 2）おもちゃのチャチャチャ

出典 神原雅之、鈴木恵津子編著 改訂 幼稚園教諭・保育士養成課程「幼児のための音楽教育」



(図2) 歌詞プリント

【演習の手順】

- ① (図2)の形別の囲みは和音の種類を表す。授業では色別で囲み、赤→ドミソ、青→シレソ、緑→ドファラ(△囲みのドファラb)、「アイアイ」の3行目「しっぽの～」の部分は黄色(レファ#ラ)、「おもちゃチャチャチャ」の5行目「とびだし」の部分はピンクで示し、和音を左手で弾きながら、歌うことから始める。本論ではドミソ→○囲み、シレソ→□囲み、ドファラ→△、ドファラb→▽とした。「アイアイ」(譜例1)の2小節目のコードはDmとなっているが、シレソ(G)とした。
- ② 右手で弾きながら歌う。歌詞が入りにくい箇所はその部分を何度か繰り返して行う。また言葉のリズムに合わせたメロディの弾き方についての説明をする。
- ③ パートに分かれて演奏する。筆者がベース音と裏拍を入れた伴奏で全体の曲の感じを示す。

- ④ 余裕がある学生にはフィルインや前奏も弾いてもらう。保育現場にいる事を想定し、全体を見ながら「さん、はい」の合図を言う学生も決める。
- ⑤ ベースラインについての簡単な考え方を提示する。
- ⑥ ①②⑤の3つのパートでのアンサンブルを行う。
- ⑦ 余裕のある学生はベースライン(左手)と右手で和音を弾くように指示し、さらには右手の和音は裏拍を弾くよう促す。
- ⑧ ①②⑤⑦のパートに分かれてアンサンブルを行う。

6. 演習における指導内容

①について

学生は3つのコードを1年生の音楽の授業で身につけている。「主要三和音」という言葉自体も習得済みである。色で囲まれた歌詞を見て、この3つの和音でこの曲の伴奏が成り立つことは、理解できる。

3つのコードが確実につかめることが重要である。色を見たら瞬時に指が移動できるように繰り返し練習させる。またその響きの移り変わりを聴くことが大切であると伝える。色の配置で機能和声に気付くことができる。最初と最後は赤、即ち、主和音である。青は赤に行く、つまり、Vの和音はIの和音に行く、と感覚的に覚えられる。また和音を弾く際の指使いの確認を行う。既に1年以上音楽の授業を受けてきているはずだが、ドファラの和音の指づかいに誤りがある学生が数名いた。

さらに全員で演奏する時は、曲の雰囲気壊さないために、ほぼテンポ表示に近い速さで演奏するようにする。片手練習であるため、初心者でも可能である。習得できずにいる学生には、筆者が側に行き、個人的に指導する。この段階ではあまり難しくないで、和音と自分の声を良く聴くように学生に伝える。

②について

右手+歌が1番難しく、これまで学生が目を背け、また教員が目をつぶってきた部分であると考え。歌詞を正確に右手のメロディにのせて歌えるまで、取りこぼしがなくなるまで繰り返す必要がある。もし授業内の時間でうまくいかない時は、歌は止まらず歌い、ピアノは付けられるところだけ弾くように、と指示した。恐らく普段学生が行なっていることと逆の事を示しているだろう。また筆者は以下の部分にチェックポイントを提示した。

「アイアイ」については2番の歌詞の「おーめめのまーるーいー」を言葉のリズムに合わせる事、「おもちゃのチャチャチャ」についても2番の歌詞「なまりのへーたい」「ラッパならして」の言葉のリズムに合うように右手のメロディを弾くべきである。注意していないと、「へ・い・た・い」（滑らかでない）、「ラ・ア・パ」などと歌ってしまう。メロディを楽譜通りに弾き、この歌詞を歌うと、このように非常に不自然な歌い方になる学生が多い。一度このような指摘をしておく、別の曲でも注意するようになると思う。このチェックポイントは、①の演習とともに、一人ずつ出来ているかの確認を行った。

③について

①と②のパートに分けて全員で弾く。この時、筆者が伴奏して全体の土台になるようにする。交代して同じように行う。狙いとしては、学生は両手で弾いている時より、少し余裕があるはずなので、全体の響きを聴くことができるようになるという事である。

④について

前奏や、途中のフィルイン（タタータタッタ）を入れられる学生には、これらを弾いてもらうようにした。また、歌い出しの「さん、はい」の合図をかける学生も決めた。

⑤について

ここで初めてコードネームについて触れる。赤丸、青丸、緑丸はそれぞれC、G、Fであり、これら

のコードの根音（ルート）を弾けば、それがベースラインになることも説明する。理解が出来なくても、3つのベースの音は弾けるようにする。G、Fのコードについては展開形であることも説明する。

⑥について

これで3つのパートに分かれて全員で弾くことができる。交代して何度も弾くようにする。間違えても途中から入るように指示する。

⑦について

余裕のある学生は、和音を両手で弾けるようにする。そしてその後、ベース音と右手を和音で弾いてみるように、さらには、(図3)のように右手は裏拍を弾くように促した。



(図3) 両手伴奏のリズム

⑧について

基本のパートは①と②と⑤で、余裕のある学生は⑦のように分担して弾くと、曲自体がより豊かになる。基本は片手+歌なので、全体を聴く余裕が出てくる。

上級者は、フィルインを入れたり、前奏を弾くなどのオプションを自然に受け持つようになる。こちらから特には指名はしないが、誰かが気を利かして担当してくれるようになった。

7. 授業を終えて

4回の授業後は、①と②が習得できているか、一人一人の確認を行った。止まらないように、ミスがないように、また歌がしっかり歌えているか、厳しくチェックした。片手+歌をしっかり身につけていれば、両手で弾き歌いできるところまで、そんなに遠くはない。

後日学生には、この弾き歌いの授業についての感想と、現場でこれをどう活かしていくか、という振

り返りの記述をしてもらった。本論文に掲載するにあたっての学生の上承は得た。

(1)学生の上承 (ピアノ経験の豊富な学生)

以下は、学校行事などでピアノ伴奏を任されている4名の学生の上承である。(原文)

Aさん

メロディと伴奏に分かれて練習する事によって、伴奏の重要性を知ることができました。伴奏では和音や分散和音にすることにより、曲の雰囲気を楽しむことができると思いました。そのため、現場で子ども達の豊かな表現が芽生えるように工夫をしながら弾き歌いをしたいと思えます。また歌うだけではなく、楽器を使ってどのようなリズムを入れるか皆で話し合ってみたり、一人一人の好きなタイミングで音を出してみる事も集団ならではの音楽が作れると思えます。今回の集団演習を通して、ただ弾き歌いをするのではなく、楽しいと思えるようにしていく弾き方をすることが大切だと思えます。音楽が好きな子どもたちになれるよう工夫しながら弾き歌いをしたいです。

Bさん

弾き歌いの練習をしてみて、ただピアノを弾いて子どもたちと歌を歌うだけでなく、保育者自身がピアノと歌を当てはめて演奏する必要があると感じました。また、今まで知らなかった練習方法を知ることができたので、今後の練習に活かしていきたいです。現場では、子どもたちと歌う前にまず自分で片手ずつ練習をして、歌詞とリズムを一致できるようにしておくことが大切だと思えます。また、右手のメロディも大切ですが、左手のコードを大きめに弾く事で、より良い伴奏になると思えます。難しい伴奏の曲が出てきたら、まずはコードでの練習をしていこうと思えます。子供たちに負けないように元気に歌もピアノも演奏できるように頑張りたいです。

Cさん

集団練習を行い、一つ一つのパートはシンプルだけど、合わせる事により一つの曲が出来上がる事

に、すごいな、と思えました。また大人で行うことにより、自分が間違えても止まることができないので、続けて弾く練習をすることができました。また、今後子どもたちの前で弾き歌いする時、止まってしまうないように左手だけでも続けられるようにしたいです。

Dさん

弾き歌いの練習の仕方や声の出し方、ピアノのアレンジの仕方を知ることができました。園生活の中では弾き歌いを行うことが多くあると思うので、子どもたちの雰囲気や状態に合わせたアレンジや、保育者の思いに気付いてもらえるようなアレンジなど、子どもが楽しめるような弾き歌いの仕方がたくさんあるな、と思えました。今まではただピアノを弾いて歌を歌うだけというふうに捉えていたのですが、授業を通して弾き歌いは「子どもの気持ちを盛り上げ、子どもたちだけでなく、保育者も一緒に楽しんで行うものだ」というふうに、捉え方が変わりました。集団演習では2つ、4つのグループに分かれて、それぞれ違うものを弾いて合わせました。違うものを弾いているのに合わせてみると、こんなにもきれいで面白いものなのだと感じる事ができました。集団演習の楽しさを知ることができて嬉しかったです。

(2)学生の上承 (苦手意識を持つ学生)

以下は、ピアノ演奏に対して苦手であると記述している学生、または、一人一人の確認テストを行った際、苦手意識を持っているであろうと筆者が判断した学生の上承である。(抜粋)

・左手と、右手で分けて練習することで、的確に覚えられました。弾き歌いは苦手意識があるので、練習を重ねることで少しずつできるようになりたいです。子どもが楽しく音楽に親しむことができる環境が作れたらいいと思えます。

・私はピアノが苦手ですぐに止まってしまうので、このような演習がある事により、止まらずに引き続けることや、メロディが遅くならないように弾く技術などを知れてとても良かったです。保育者になっ

てから求められるポイントを深く学べられたと思います。

- ・ここまで歌に力を入れて、歌に合わせたピアノの弾き方をしたことが無かったので、左手と右手それぞれ丁寧に練習できた。

- ・ただ音符が読めて、音が弾けるだけではいけないのだ、ということがわかりました。押さえた和音から出てきた音をよく聞くことが大切だ。

(3)学生の記述(様々な気づき)

学生たちの記述の中で出てきた表現を以下に示す。

【集団演習】について

- ・みんなで合わせて演奏することの楽しさ、難しさ、達成感を感じた。自分のペースではなく、周りに合わせて弾くことが大切だということ学んだ。

- ・集団演習は現場の子どもたちの指導に活かせると思った。(楽器やピアノ演奏、マーチングなど)

- ・集団演習をすることにより、子どもたちの歌に合わせてたり、パートに分かれて演奏できるので、子どもとのコミュニケーションになると思う。歌を通して意思疎通ができると思う。

- ・周りに合わせられるよう、頑張ろうという気持ちになった。

- ・聴く力を身に付けることができた。

【弾き歌い】について

- ・何度も練習することが大切だ。何度も練習しようという気持ちになった。

- ・歌を中心にピアノ伴奏をそれにのせて練習すると良いと学んだ事で、歌にも力を入れるようになった。

- ・子どもたちと楽しく歌えるようにしたい。楽しく歌うことが大切だ。

- ・練習をしていく中で自分の中にある「恥」とは何か考えるきっかけになった。なぜ恥ずかしい気持ちになってしまうのか、それは自分自身に自信が無いからだ実感した。

- ・楽譜通りに弾かなくても充分伴奏になる。簡単にして伴奏する事で余裕を持って弾けるようになる。

8.考察

本授業が現場で求められる弾き歌い能力の育成にどの程度の効果をもたらしたかについて、学生のアンケート結果から考察した。アンケートは、授業を受講した学生36人に対して、授業の感想及び、この演習を現場でどのように活かしていくか、について自由記述形式で記入させ、35人から回収した。

(ア) ピアノを弾きながら子どもと一緒に歌える能力について

この能力に関しては、学生のアンケート結果ではなく、筆者が学生一人一人に対し、4回の授業終了後に確認を行った。確認は、右手+歌と左手+歌の弾き歌いが、曲に合ったテンポで弾けたかどうか、及び歌詞が正確に歌えているかどうかの観点で行った。その結果30名は達成していたことを確認した。36人中30名が弾き歌い能力を身につけることができた事で本授業は効果的であったと考えられる。

(イ) 子どものペースに合わせられる能力について

自由記述の中で、子どものペースに合わせることが大切であると回答した学生が13名いた。

学生はこれまで、一人で「弾き歌い」をしてきたが、集団演習をすることで、他者と合わせて演奏する大切さに気がついたと考える。

(ウ) 演奏を止めてしまっても途中から再開させる能力について

自由記述の中で、途中で止まってしまっても演奏を途中から再開させられることが大切であると回答した学生が7名いた。

学生はこれまで一人で練習していたので、自分のペースで演奏する経験しかなかった。しかし、本授業で、集団演習を経験させたことにより、保育現場に近い状況で、音楽の流れを止めずに演奏し続ける大切さを認識させることができたと考える。

また、本アンケートは自由形式であったことから、上記とは別に下記のようなコメントがあった。

- ・子どもと楽しく「弾き歌い」したいと回答している学生が11名。

- ・弾き歌いで子どもと意思疎通ができると回答している学生が2名。
- ・弾き歌いの練習方法がわかったと回答している学生が12名。
- ・伴奏の重要性がわかったと回答している学生が5名。
- ・集団演習の経験を現場の子ども達への合奏指導に役立てたいと回答している学生が3名。

これらのアンケート結果は、本授業によって就職を目前にしている学生達に、保育現場での音楽表現活動をイメージさせることができたと考える。

9.終わりに

授業の冒頭で筆者は、以下のことを伝えた。

「楽譜に書かれている音を全て拾おうとしないで」、「弾き歌いはピアノの初級者も上級者も関係ない」、「コード伴奏でも、たとえ単音でも、弾き方次第でしっかりと歌を支えられる」。このように言うのと、初級者は、「この方法だったら私にもできるかもしれない、やってみよう」と思うであろう。そこが出発地点であると考え。またピアノの上級者は、今までの演奏経験で十分に現場に対応できるであろうと考えていたはずだが、この演習を通して、「弾き歌い」を保育者としての新しい学びの一つとして捉えるであろう。

私たち音楽の教員はその全てと言ってもよいほど、学生時代の専攻がクラシック音楽である。そのため、作曲者の楽譜を正確に演奏することに重きを置いてきた。しかしそのような意識だけで、保育者養成校で授業をすることは適切ではないと考える。2年間という短い時間で、学生が現場に対応できる能力を効率よく身に付けられ、またその技術の習得により、様々なことを感じ、考える感性が磨かれることを期待しながら授業を計画することが大切であると考え。

参考・引用文献

- 「幼稚園教育要領解説」 文部科学省 フレーベル館 (2018)
- 「保育所保育指針解説」 厚生労働省 フレーベル館 (2018)
- 平石葉子 (2014) 「幼稚園、保育所から保育者養成校に求められている音楽教育」 奈良保育学院研究紀要 第16号 pp. 81-89
- 紙屋信義 後藤みゆき (2008) 「ピアノによる子どもの歌伴奏の効果—アレンジによる伴奏法を考える—」 東京未来大学研究紀要 第1号 pp. 67-75
- 中野研也・河野久寿 (2012) 「保育現場で必要とされる音楽能力と、幼児音楽教育との関連」 仁愛女子短期大学研究紀要 第44号 pp. 71-78
- 田中 節夫 (2018) 「幼児教育学科におけるピアノ教育の方法試論」 山陽論叢 第25巻 pp. 231-243